

基礎看護技術の学内演習における学生の学びのプロセス
—グループの成長に焦点をあてて—

平瀬 節子*, 野村 晴香*, 高橋 永子*, 久保田富女**, 橋本 和子*

*高知大学医学部看護学科 〒783-8505 高知県南国市岡豊町小蓮

**高知県立総合看護専門学校 〒781-5103 高知県高知市大津乙 811

The learning process for the students in simulation training course
for basic nursing skills,
—Bringing focus into self-development—

Setsuko HIRASE*, Haruka NOMURA*, Eiko TAKAHASHI*,
Tomijyo KUBOTA**, Kazuko HASHIMOTO*

*Dept. Nursing, Kochi Uni. Kohasu, Oko, Nankoku City, Kochi(783-8505) Japan

**Kochi Municipal General College of Nursing.

811 Ohtsuotsu, Kochi City, Kochi Prefecture(781-5103)Japan

要約

本研究の目的は、基礎看護技術の学内演習における学生の学びのプロセスを明らかにし、看護技術教育における教育方法に示唆を得ることである。2年次の看護学生に、看護学生基礎看護技術の学内演習においての体験を感想として記述してもらい、グループの成長に焦点をあて、質的手法を用いデータを分析した。その結果、基礎看護技術の学内演習における学生の学びのプロセスとして【学習方法の混乱】【役割の自覚】【学びの深まり】が抽出され、効果的な学習方法であることが明らかとなった。

Abstract

The object of the present study is to determine the learning process of students in simulation training course for basic nursing skills, as well as to obtain suggestion in way of education for basic nursing skills.

We asked the second grade nursing students to describe their opinions of experiences in simulation training course for basic nursing skills, and analyzed the data, which they described, by a qualitative way in order to bring focus into self-development.

As a result, confusion of learning, consciousness of roles, and deepening of learning were extracted throughout process of learning for the students in simulation training for basic nursing skills, and it was evident that the simulation training was an effective way for learning throughout this research.

キーワード：基礎看護技術 学内演習 グループ学習 グループダイナミクス

Keywords : basic nursing skills, simulation training for nursing skills,
group learning, group dynamics

はじめに

看護基礎教育における看護技術教育は、カリキュラム改正による実習時間の減少や、在院日数の短縮に伴う患者の重症化、医療における安全確保、患者の権利擁護から学生が臨地実習で経験できる看護技術は限られる傾向にある¹⁾。また、現在やめたいと思っている看護師の約71%が「基本的看護技術が身につけていない」という悩みを抱えているという報告もあり、看護基礎教育における看護技術教育について、その教育内容や到達目標の改善が求められている²⁾。

看護技術に関する研究では、看護技術習得に関する教授法の検討や学生の技術取得状況、自己教育力に関する研究などがなされており、指導上の学生の課題の明確化や演習によるリアリティの欠如、教授方法の工夫の必要性や自己学習の時間の確保など、自主的に学べる学習環境の整備に課題があり、今後は学生の学習活動に関する研究を発展させることの必要性が述べられている^{3) - 8)}。

本学の基礎看護学講座で行っている基礎看護技術の学内演習では、教員のデモンストレーションと学生のリーダーを中心にグループ内で学生同士が指導しあうという、グループダイナミクスを活用した学習による教授方法を行っている。本研究では、現在のグループ学習が学生にどのような学びの体験となっているかそのプロセスを明らかにし、それに対する教授方法に示唆を得た。

I. 研究目的

学内演習のグループ学習から学生が体験する学びのプロセスを明らかにし、効果的な教授方法を検討する。

II. 研究方法

1. 対象

看護系大学2年生61名で女性49名、男性12名で年齢が19～23歳の学生。

2. 調査期間：2006年5月25日～7月20日

3. 分析方法

生活援助技術のチェックに合格後、「グループ内でのリーダーまたはメンバーを体験して考えたことの感想」を記入してもらった。その記載された内容から、学生が体験した学びに関して特性のある文章を抽出し、グループの成長に焦点を当て内容分析の手法を用いて分析、コード化していった。分析の信頼性、妥当性を高めるために繰り返し分析し、内容

の意味を表現できているか検討を重ねた。

4. 倫理的配慮

対象となる学生に対して次のことを文書にて説明し、研究の参加に同意する場合に、同意書に署名してもらった。

- 1) 研究の趣旨・目的
- 2) 研究に対する参加は自由意志に基づくもので、研究への参加の有無が今後の学習に影響を及ぼさないことの保障。
- 3) 個人が特定できないよう、データの取り扱いを行う。
- 4) 研究結果は、関連学会や雑誌への投稿、学内での発表などを行う。

Ⅲ. 生活援助技術論演習の概要

1. 生活援助技術論の目的

- 1) 学生は、人間を統合体として捉え、病気や治療に対する人々の反応が理解でき人々の日常生活行動援助ができる。
- 2) 科学的・理論的根拠に基づいた援助が提供できる。
- 3) 倫理的判断能力を磨き、社会の流れに敏感に対応できるようになる。

2. 演習方法

- 1) グループは3～4名で構成し、61名を20グループに分けた。
- 2) 演習ごとにリーダーを各グループで話し合いにより1名選出した。
リーダーが教員からデモンストレーションを受け、グループメンバーに原理原則に基づいた技術を伝達する。
- 3) デモンストレーション実施から1週間後の演習で教員による技術の確認を行い、原理原則に基づいた技術を習得できているか、学生個人に対して教員が技術チェックを行う。
- 4) 技術チェックに合格すると、各項目の演習についてのレポートを提出する。
演習の項目は「移動・体位変換」「無菌操作」「洗髪」「全身清拭」「便尿器の使用・陰部洗浄」の5項目である。

表1 基礎看護技術教授内容

項目	技術項目
移動	側臥位 腹臥位 水平移動 上方移動 半座位 座位 端座位 車椅子への移乗 良肢位
無菌操作	滅菌物の取り出し方 ガウンテクニック 滅菌手袋の装着
洗髪	ケリーパットを用いたベッド上での洗髪
全身清拭	石鹸を用いた全身清拭
便尿器の使用・陰部洗浄	尿器の挿入 便器の挿入 陰部洗浄

IV. 結果

表2 学内演習における学生の学びのプロセス

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	総数
学習方法の混乱	リーダーに強く依存する	リーダーの情報がすべて	3
		リーダーに頼っていた	3
		リーダーが教えてくれなかった	3
		メンバーはデモを見ていないので細かいところがわからない	4
		リーダーは代表者として理解し伝えなければならない	1
		資料がなく困った	3
		資料作りはリーダーの重要なことである	1
	伝えることが難しい	理解できていないと教えることは難しい	2
		伝えることが大変	10
		何度も説明しないといけないので大変	1
		実際にメンバーに伝えるときにわからなくなる	7
		人に教えるということは難しい	18
	デモストレーションの理解が困難	伝達のときにさまざまな意見が出てわからなくなった	4
覚えることが多く理解が難しい		4	
一人で何とかできるものではない		1	
実際に伝えた内容が間違っていた		1	
リーダーが信用できない	他のグループと違うと不安になった	9	
	デモをみていないのでわかりにくかった	3	
	メンバーに伝わらないこともあるような気がした	1	
	リーダーに習っても疑問がわいた	2	
役割の自覚	相手の立場の気づき	理解できていないと教えることは難しい	2
		教えることが多くて大変	3
		伝えることが大変	7
		何度も説明しないといけないので大変	1
	リーダーの自覚	メンバーに迷惑をかけた	3
		正確に伝えることへの責任	9
		資料作りが大変	6
		自分が理解できないと伝えられない	6
		自分に知識がないと質問に答えることができない	1
		わからないところがあるままメンバーに伝えない	3
	メンバーの自覚	不明なことは一緒に考えて理解する	6
		なぜか考えることが必要(原理原則)	4
自ら学ぶ(積極的になる)		7	
リーダーをサポートしていく		1	
不十分なところは自分で調べる		7	
見ているだけではできない		7	

学びの深まり	協力不足の認識	もっと協力したら工夫ができていた	3
		話し合いが不十分	4
		グループの中で閉じこもっていた	1
		1人で練習すると情報が入ってこない	2
		グループでの練習不足	2
	協力する大切さがわかる	グループの中の協力が大切	10
		教えあいながらできた	9
		みんなで考えた	12
		団結できた	3
		グループ行動は勉強になった	1
		リーダーに協力できた	2
	意見交換による理解の深まり	みんなで考えるのが楽しい	2
議論することでよりよい考えが出る		5	
他からのアドバイスで間違いに気づく		7	
いろいろな意見が出た方がよい		6	
自分たちで考える機会が多いほど力になる		3	
グループで共有できることが重要	4		

V. 考察

本研究の結果、学内演習におけるグループ学習による学生の学びのプロセスとして、【学習方法の混乱】【役割の自覚】【学びの深まり】の3つの大カテゴリーが抽出された。そして、演習開始当初には、【学習方法の混乱】を経験していた学生は、グループ学習が進むにつれて、リーダー、メンバーとしての【役割を自覚し】次第に【学習の深まり】を体験するという段階を踏んでいた。

1. 学習方法の混乱

【学習方法の混乱】は〈リーダーに強く依存する〉〈伝えることが難しい〉〈デモンストレーションの理解が困難〉〈リーダーが信用できない〉からなっており、それらは、学習の困難さの体験とグループでの信頼関係の確立の未熟さから来るものであると考えられた。1年次に机上の学習を主体としていた学生は、「技術を習得する」という行動を伴う学びについて初めて遭遇し、どのように対処してよいかわからない状況が学習の混乱をまねいている。また、習得する看護技術はリーダーから伝達されるため、学習の混乱が、リーダーの伝達不足ととらえられたり、リーダーの伝達以外学ぶ方法が考えられないというような、グループ活動の苦しい状況がうかがえる。教員は、演習当初の段階の混乱を学生の自主的に学ぶ部分を尊重しつつ、混乱だけで終わらないような支援が必要となる。

2年次の最初の段階でグループ学習として取り組む演習項目は、「移動」「無菌操作」である。これらは、原理・原則をもとに発展する「洗髪」や「清拭」などの身体的ケアの基

礎となる技術である。学生が自分で調べるなど、リーダーに頼る以外の学習方法の気づきを助けるようなかわりが教員に求められる。

2. 役割の自覚

【役割の自覚】は〈相手の立場の気づき〉〈リーダーの自覚〉〈メンバーの自覚〉からなっている。演習の項目の進行にともない、学生はリーダーとメンバーの両方を経験する。お互いの立場を経験することで、メンバーはリーダーの大変さを理解できている。リーダーを中心に行うという演習の構造上、〈リーダーの自覚〉は当然出てくるものであり、それが、学生の負担にもなりかねない。しかし、その一方で〈メンバーの自覚〉が抽出されたことが演習開始当初、【学習方法の混乱】で抽出されていた〈リーダーに強く依存する〉〈リーダーが信用できない〉という体験の変化に影響を与えるととらえることができる。〈相手の立場の気づき〉や〈メンバーの自覚〉はグループ学習による学生間の相互作用から生まれたものと考えられ、メンバーの態度の変容を促す体験ではないかと考えられる。

3. 学びの深まり

【学びの深まり】は〈協力不足の認識〉〈協力する大切さがわかる〉〈意見交換による理解の深まり〉からなっている。〈協力不足の認識〉は、リーダーやメンバーが行うグループの不足部分の状況判断とも考えられる。お互いの役割を自覚することで、学習方法に対する視野が広がり、そのためグループ活動の振り返りができるようになっている。

杉野⁹⁾は「グループ学習は、学習集団のプロセスから態度変容が促されたり、認知が広がったり、問題解決能力が増すなどの効果を狙って行う」と述べている。その意味で言うと生活援助技術の教授方法としてグループ学習を用いることは、適切であると考えられる。しかし、グループ学習のマイナス面として、メンバー構成やリーダーシップをだれがとるか(背景や力量)などにより、いつでも成果が上がるとはいえず、グループを育成するためには、個々のグループの状況に応じた支援が必要であると考えられる。

また、個人のコミュニケーションの能力を育てるなど、1年次で学ぶ科目との連携も重要であると考えられる。

VI. 結論

1. グループの成長に焦点をあてた、基礎看護技術の学内演習における学生の学びのプロセスは【学習方法の混乱】【グループの自覚】【学びの深まり】の3つの大カテゴリーが抽出された。
2. グループ学習による学生の相互作用により、【グループの自覚】が生まれ【学習方法の混乱】に対して影響を及ぼしていた。
3. 研究結果からグループ学習の効果が見られ、生活援助技術の教授方法として適切であると判断する一方で、個々のグループの状況に応じた支援の必要性が示唆された。

おわりに

本研究は、自由記載としたデータから分析を行ったため、どの程度の学生がこのようなプロセスを体験したのかという視点での分析には至っていないところに研究の限界がある。今後は、演習後の授業評価を行う際に、研究結果をもとに現状の把握を行い、より効果的な教授方法の構築が課題となる。

引用・参考文献

- 1) 看護基礎教育における看護技術のあり方に関する検討会：看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書，2003.
- 2) 社団法人 日本看護協会：2004年 新卒看護職員の早期離職等実態調査 報告書，日本看護協会，P47-48，2004.
- 3) 内正子・津田紀子・高谷嘉枝：基礎看護技術演習前後における学生のエゴグラムの変化—学生が主体となる教授方法を通しての考察—，神戸大医学部保健学科紀要，第14巻，109-116，1998.
- 4) 岩本真紀・近藤美月・立石有紀他：ビデオのフィードバック機能を利用した看護技術習得における学習効果（その2）—学生に指導係を担当させたグループ学習を組み合わせ—，香川医科大学看護学雑誌，第6巻第1号，47-54，2002.
- 5) 菊池昭江：看護学部1年生の学習意欲と学習時間および学習理解度との関連，東京女子医科大学看護学部紀要 Vol. 2，1999.
- 6) 穴沢小百合・松山友子：わが国の看護基礎教育過程における基礎看護技術演習に関する研究の動向—1991～2002年に発表された文献の分析，国立看護大学校研究紀要，第3巻第1号，54-64，2004.
- 7) 吉野由美子：擬似患者体験を取り入れた学習に関する教師の教育観の検討—排泄に関連する単元において擬似患者体験を取り入れたことのある教師の教育観の比較検討から—，東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設年報第12巻，1-7，2002.
- 8) 森田敏子・南家喜美代・有松操他：達成動機を刺激する模擬患者を用いた看護技術教育方法の開発に関する研究—模擬患者を導入した吸引の看護技術試験；模擬患者の認識から—，日本看護学会論文集（看護教育）第36回，311-313，2005.
- 9) 川島みどり・杉野元子・西元勝子：看護現任教育，医学書院，第1版，第7刷，p. 97 - 98，1998.
- 10) 平野馨：対人関係の基礎知識，日本看護協会出版会，第3刷，1997.

（受理日 平成18年12月10日）